

村上春樹にみる近代日本のクロニクル

藤井 聡

筆者が村上春樹氏の小説に始めて触れたのは、昭和の時代がまさに終わらんとする頃であったかと思う。その頃、村上春樹氏は「ノルウェイの森」の大ヒットにより流行作家の一人としてもてはやされていた。しかし、当時大学生であった筆者には、流行ものにはそれが流行ものであるというだけの理由でどことなく不信感を抱き、村上春樹氏の小説にあえて触れようとはしていなかったことを覚えている。ところが、何かのきっかけで、おそらくは知人からは是非一度と薦められたのである。軽い気持ちではじめて手に取った村上春樹氏の小説が、「羊を巡る冒険」であった。それ以後、村上春樹氏のような小説を何度も繰り返し読んだように思う。しかし、ストーリーについては、どの小説についてもよく覚えてはいない。おそらく、もう一度読み返せば思い出すことはできるのであるが、それとて、何日かすればすぐに忘れてしまうのではないかと思う。

しかし、村上春樹氏の小説の中に自らが入り込んだ時の「気分」だけは、手に取るように思い出すことができる。もう少し正確に言うなら、その気分は、思い出す、というような種類のものではない。むしろそれは、村上春樹氏の小説に触れたときに形作られ、そしてその後、我が身の内に潜み続けている、ある種の輪郭をもったものでもいっべきものであるように思う。無論それは、村上春樹氏の小説の中にその気分に対応する「実態」があり、我が身の中に異物として注入された、というようなものではない。我が身の内に臆気ながらも存在していたある種の気分が、村上春樹氏の小説という触媒を通じて、明確化し、自身でもはっきりと見て取れる程に、輪郭がくっきりと浮かび上がってきたといった方がいいように思う。

無論、この様に述べただけでは、その「気分」とは一体いかなるものかについて何かを語ったことにはならない。しかし、百万語を費やしても、その「気分」が何なのかを十全に、正確に、語り尽くすことはできないようにも思える。ただし、それを踏まえた上でもなお、筆者には、次のように思えてならない。すなわち、その「気分」について語ることは、自分自身のみならず、戦後という時代の行く末、さらにはいうなら、アメリカとの戦いに軍事的に敗れ、そしてその後、戦後という時代全体を通じて精神的にも完全なる敗北を迎えつつある現代の日本の行く末を考えるにあたって、幾ばくかの意味があるように思えるのである。

こうした筆者の予期が的を射たものなのか、それとも単なる思い過りに過ぎぬものなのかは筆者には分からない。しかし、万が一にでもその予期に一定の妥当性があるのなら、無理を承知でその気分を表現してみることは、この時代に生まれ、その気分を感じ得た者としての一つの務めのようにも思えるのである。

日常の裂け目

村上春樹氏の小説に登場する主人公は、多くの場合、誰しもが「平凡」と呼ぶのではないかと思われるような、平均的なサラリーマンの家庭に育った一青年である。その青年は、時には大学生であったり、時には仕事をはじめてまもない社会人であったりする。しかし多くの場合、そうした社会的な役割はそれぞれの小説の中で実質的な意味をほとんど持たない。

村上春樹氏の小説においては、主人公は「僕」と表記されることが多い。氏の多くの小説では、その「僕」が普通の日常の生活から少しずつ逸脱し、非日常的な時間と空間の中へと迷い込んでいく。非日常的な空間では、ありとあらゆる非日常的なことが起こる。井戸の中に入ると外国の過去の世界とつながっている。ホテルのエレベータを降りると、そこは異世界に繋がっている。道路の上に空から「魚」が降ってくる。そして、様々な人物に「羊」が憑依する。

「僕」がそうした非日常的な世界へと迷い込んで行くのは、決して、「僕」がそれを望んだからではない。むしろ「僕」はそうした非日常的な世界で起こる様々な厄介な出来事に当惑している。「僕」はできることなら日常的な世界の中で少ずつ身の回りに集めてきた自らが好む食事やお酒、そして自らが好む友人達や配偶者と共に時間を過ごしたい、というささやかな願いを抱いている。しかしある時、彼の暮らしが部分的に損なわれてしまう。例えば、「僕」が好きであった女性や友人が「僕」の前から去り、彼が好む日常が損なわれてしまうこととなる。

「僕」は日常が損なわれてしまったことに当惑しつつも、その事実を引き受けようと努力する。その努力を重ねながら、彼は自分自身の日常が損なわれてしまったのは単なる偶然ではないと感じ続ける。そうした事態が招かれたのは、何か奥深い、本質的な原因故に違いないと感じている。しかも、その原因は、どこかの誰かの、不吉で、邪悪な、悪意の固まりのようなものではないかと、臆気ながらも直感している。

村上春樹氏のような小説において、主人公たる「僕」が日常的な生活から非日常的な世界へと迷い込んで行くのは、この直感が「僕」の中に拭いがたく存在しているからに他ならない。

日常に裂け目ができ、その裂け目から、なにがしか邪悪なる雰囲気を携えた本質の原因が顔をのぞかせた時、我々がとりうる行動は次の二種類に分けることができる。見て見ぬふりをするか、それとも、その存在から目を背けずに対峙するかである。

もしも、日常を損なった本質的な原因を覆い隠し続けるのなら、それまでの日常を表面的に営み続けることはできるであろう。仮に妻が目の前から消え失せたとしても、新しい妻を捜せばよい。友人が消え去ったとしても、新しい友人を捜せばよい。新しい妻や友人が見つからないのなら、自身が好きな音楽や趣味に時間を使え

ばよい。そうやって、おもしろおかしく人生を生きていくことは、決して不可能ではない。

しかし、日常が損なわれてしまった本質的な原因と正面から対峙することを選択するのなら、必ずしも、それまでと同じ暮らしを続けていくことができるとは限らなくなってしまう。妻が目の前から消え失せたのは何故なのだろう、もしもその理由が、自身の内側にあるのなら、反省と努力が必要となる。しかしその理由が、日常の背後に潜む、どこかの誰かの邪悪なる悪意のようなものであったとするなら、それが「悪意」である以上、それと戦わざるを得ない。そしてそれこそが、「僕」を日常的な暮らしから逸脱させてしまう原因なのである。

日常の振る舞い

村上春樹氏の小説の主人公たる「僕」が、邪悪なるものと対峙しようとするのは、「僕」自身が、ある種の社会正義を振りかざし、何らかの社会運動を展開するような個性を持つからではない。「僕」は、決してそうした啓蒙的、革命的な思想を持ち合わせてはいない。美味しい食事をとり、美味しいお酒を飲み、好みの音楽を聴き、彼の愛する妻や友人達と時間を過ごすのであり、そのための一つ一つを身の回りの手の届く環境の中から厳選して日常を構成している。その日常の維持のためには努力が必要であるものの、その努力を決して怠らない。ただし、彼は、利己的に自らの利益のみを追求しようとする個人ともまた異なっている。日常のなかで彼に割り振られる役割に対して、彼は敏感に反応する。そして、割り振られた役割の中で、できるだけ「公正」に振る舞うことができるように、努力する。

こうした傾向を持つ「僕」は、自身の身の丈をできるだけ理解するように努力し、その範囲の中で公的な活動をなし、そしてその余暇の中でつましやかに日常を楽しむいわゆる「庶民」といつて差し支えない存在であるように思える。

ここで忘れてはならないのは、庶民は努力なくして庶民たり得ない、という事実である。なぜなら、例えば、J・S・ミルが「自由論」の中で繰り返し主張しているように、秩序あるものは時間の経過と共にほころび、「悪い方向」へと流されて行かざるを得ないものだからである。一切の努力無くして、日常をかつての「ままに」しておくことはできない。いわんや、それを「改善していくこと」など、努力無くしてありえない。

主人公たる「僕」が、日常の「ほころび」にはまりこみ、そこから非日常的な世界へと迷い込んでしまうのは、彼自身が、日常のほころびを捨て置かない精神的傾向を持つ「庶民」であるが故なのである。あるいは、日常のほころびの割れ目から何がしか邪悪なるものが垣間見えたという事実そのものものに対して、「公正」に振る舞おうとする「庶民」であるが故なのである。邪悪なるものの存在につきつす気がつきながらも、それを無きものの様に振る舞うことが「公あやむけに正しい」振る舞い

とは、到底言えないのである。

日常への帰還

こうした契機によって、「僕」は、日常の背後に潜む、大半の人々が気づきもしない潜在的な、「邪悪なるもの」との「戦い」に巻き込まれてしまつた。

しかし、例えば、「羊を巡る冒険」をはじめとする、村上春樹氏のいくつかの初期の小説では、彼は、邪悪なるものと向き合い、様々な「冒険」を繰り広げはするのだが、実のところ、それは「戦い」と呼べるほどのものではない。もちろん、「僕」は、邪悪なるものを見て見ぬふりをするわけではない。しかしながら、彼には、その邪悪なるものに対して為す術がないのである。彼は、ただ、「見る」以外に何も出来ない。結局、彼の大切なものを助け出すことができない。そして、全ての努力が無駄に終わり、努力すら出来なくなったときに、「僕」は再び、日常に舞い戻ってくる。

その時、「僕」は、その邪悪なるものに対して為す術を持たなかったことを、そして、彼が失ってしまったものは二度と戻らないのだということ深く理解する。その時、大いなる哀しみが「僕」に去来する。そして、その哀しみとともに、小説は終わる。

いうまでもなく、その「僕」に去来した哀しみは「僕」を追体験してきた読者ひとり一人にも去来する。そして、その小説を閉じた後もなお、読者に残り続ける。それは、暖かみや有機的な感じを伴うような種類の哀しみではない。強いて言うなら、無機的で冷え切った、何もかもが真空に放り出されたような感じを伴うような種類の哀しみである。

本稿冒頭で論じた、村上春樹氏の小説に触れることで筆者の中でその輪郭が浮かび上がることとなったその「気分」とは、この「哀しみ」そのものなのである。

日常を生きる多くの者にとっては、邪悪なるものとの戦いはつねに曖昧であり、そして、その勝敗は常に不確実なものである。事実、村上春樹氏の小説に始めて触れた筆者が大学生のころ、筆者は日常の中でまともにも邪悪なるものと戦ったこともしなければ、自らの大切なものが邪悪なるものに奪われるということが、いかなる事であるのかも理解してはいなかった。そんな筆者には、村上春樹氏の「小説」の「僕」に去来する哀しみと同程度の深い哀しみが去来したことなど、一度も無かったのである。仮に類似したものがあつたとしても、それは淡いものにしかならなかつた。そうであればこそ、「僕」を追体験し、小説を読み終えた時にはじめて、筆者の内にその「哀しみ」がくつきりと残されることとなつたのである。

その「哀しみ」は今に至るまで我が身の中に生き続けている。そして今もなお、成長し続けている。それは、邪悪なるものに対する敗北感が去来する度に、少しずつ

つ成長してきたのではないかと思う。ただしそれと同時に、親しい者の死に直面する毎に、少しずつ大きくなってきたようにも思う。

つまり、その「哀しみ」は、「死」とも関わっているように思えるのである。例えば、村上春樹氏は、いずれかの小説で、「死の固まりのようなもの」について述べている。その「死の固まりのようなもの」は最初は曖昧な存在であったものの、徐々にはっきりとした形をとるようになり、今では常に自身の周りにあるのだ、と述べている。この「死の固まりのようなもの」は、筆者が村上春樹氏の小説を通じて我が身の中ではっきりと形作られた、かの「気分」あるいは「哀しみ」と大いに重なっているのではないかと思う。

事実、筆者が、小説の中ではなく実際の日常の中で「死の固まりのようなもの」を最も強く感じた場所は、筆者がこれまでに指摘した「哀しみ」を最も強く感じた場所と全く同じ場所なのであった。

それは、東欧の国、ポーランドのアウシュビッツである。

アウシュビッツ

ポーランドは、アメリカや西欧諸国に比べれば、いわゆるグローバルゼーション、あるいは、市場主義の影響が未だ少ない国の一つである。例えば、街中ではマクドナルドやファミリーレストランを見かけることはほとんどなく、市場には地産のものが並べられている。街中の人々は決して洗練された服装を身につけているわけではないが、人を不快にさせるような身なりの者はいない。食事にしても、フランスやイタリアのように豪華で洗練されたものではなかったが、十分、満足できるものであった。ポーランドに訪れていた一週間余り、アメリカやドイツ、イギリスやフランスでは体験したことのないような、ゆったりとした気分で時間が過ぎていったことをよく覚えている。

アウシュビッツは、ポーランドの歴史都市、クラコフから自動車で一時間ほどの場所にある小さな田舎町オシフィエンチムの郊外にある。クラコフからアウシュビッツまでの一時間あまり、自動車の車窓からは、ひたすら田園が広がっていた。その美しい田園風景は、おそらくは、百年以上昔から変わることなくそこに有り続けられたものではないかと思う。美しい田園風景、という言葉以上に、その美しさを表現する言葉を見つけれないことが、くやまれるような田園風景であった。

アウシュビッツは、第二次世界大戦中、ユダヤ人を大量に虐殺するために作られた施設の名称である。その施設は、現在は博物館となっている。個々の施設の中には、当時、そこで何が行われていたかが、淡々と、言葉少なく、展示されている。人毛だけが敷き詰められた部屋、靴や櫛ばかりが展示されている部屋、入所日と死亡日が記載された顔写真で壁が覆い尽くされた廊下、そして、アウシュビッツにおける捕虜の処理の手続きについての客観的記述。

ヨーロッパ各国から、ユダヤ人捕虜がアウシュビッツに送られてくる。捕虜達は

アウシュビッツの鉄道駅に降りる。駅から、収容所に向かう。収容所に入るとすぐに、労働力として使えそうな屈強な捕虜とそうでない普通の捕虜が峻別される。労働者として使えそうにない捕虜はすぐに「シャワー室」と称されるガス室に送られ、すぐにそこで処理される。収容所に送られた屈強な捕虜は毎日重労働が割り当てられ、長くても十八ヶ月程度で過労のため息絶えることとなる。そして、死体は効率的に焼かれ、処理されていく。

すなわち、ここでは、ユダヤ人を処分するという目的の下、ありとあらゆる合理化が進められていたのである。そこで行われていたのは効率化という名の合理化ばかりではない。死者を資源として有効に利用していくという合理化もすすめられていた。死者の靴や櫛はリサイクルされる。死者の髪の毛から絨毯が加工される。そして、死者から抽出される油からは石鹸が作られる。

村上春樹氏の小説に、「世界の終わり」と「ハードボイルドワンダーランド」という小説がある。この小説は、「世界の終わり」と「ハードボイルドワンダーランド」という二つの世界の物語である。後者の「ハードボイルドワンダーランド」では、活劇風のストーリーが展開される。その一方で、前者の「世界の終わり」では、ほとんど時間が止まっているのではないかとすら思える程に、何もかもがゆったりと進行していく世界が描かれる。その「世界の終わり」は、何か底知れぬ、深い「哀しみ」が充満する世界でもあった。筆者は、アウシュビッツからクラコフへの帰路途、車窓からその田園風景を見つめながら、もしも「世界の終わり」がこの世にあるのなら、こういう場所なのではないかと感じていた。

しかし今思い返せば、次のように言うことの方が正確なのではないかと思う。すなわち、このアウシュビッツという二つの実態に宿るイメージの本質を取り出し、それを言葉で表現しようとするれば、「世界の終わり」のような記述にならざるを得ないのではなからうかと。

戦後における「戦争」

筆者が、村上春樹氏の小説を通じて、始めて明確に体験した「哀しみ」は、自らの大切なものを奪う邪悪なるものに対して為す術なく、したがって、自らの大切なものが損なわれてしまうが故に析出するものであった。しかしながら、欺瞞と虚構にまみれた日本の戦後空間の中では、それこそ「小説」という閉じられた空間の外で、そういった哀しみを探し当てるのは、容易なことではないようにも思える。

もちろん、例えばアウシュビッツに赴けば、ほとんど手にとって眺めることができるほどに、「死の固まりのようなもの」を感得することができるようにも思える。そしてそれと同時に、巨大なる悪に対して自らの無力さを十二分に把握することも、そして、それ故に、深い「哀しみ」を感ずることもあるようにも思う。

しかし、例えば、戦後の社会科教育を受けた者がその延長でアウシュビッツを訪れれば、そこで抱く感想は、彼らが日本の長崎、広島の記事を見学した際に抱く

であろう感想と、大差ないものとなってしまつように思えてならない。

おそらく、村上春樹氏は、「戦争」こそが、彼が表現しようとした「死の固まり」のようなもの「や」「哀しみ」を最も純粹な形でこの現実の世界で具現化したものに他ならないと考えていたのではないだろうか。いやむしろ、実態としては、その逆であるように思う。すなわち、「戦争」の本質を表現するためには、「戦争」とはほぼ無縁の筋書きの小説という装置を利用しつつ、「戦争」の本質たる「死の固まり」のようなもの「や」、「日本の敗戦」の本質たる「哀しみ」を表現せざるを得なかったのではなからうか。なぜなら、この戦後の硬直化した言論空間の中で、戦争を直接、戦争として語つたとしても、アウシュビッツの「見学」が「ピース」の契機となつてしまつように、何ものをも生み出さないこととなるからである。

この様に、村上春樹氏はいわゆる「左翼」と言われる言説から汚染されることを避けた一方で、いわゆる「右翼」と世間に言われてしまつような表現形式も頑なに拒否した。例えば、「羊を巡る冒険」の冒頭の章で、三島由紀夫氏の割腹自殺直前のテレビ映像を「僕」が眺めるといふシーンが登場する。その時、「僕」はそのシーンを見ながら、それはどうでもいいことなのだと言つてのけるのである。こつして、彼はいわゆる「右翼」と呼ばれる言説から汚染されることも避けたのであった。ただし、高沢秀次氏が指摘しているように、そして、後に述べるように、村上春樹氏は三島由紀夫氏の呪縛を引き受けた作家なのであり、村上春樹氏にとって、三島由紀夫氏の割腹自殺は決して「どうでもいいこと」ではなかったのである。

しかし、物心が付いた時には既に戦後空間ができあがりつつあった村上春樹氏にとっては、「戦争」や「三島」を如何様に語つたとしても、右翼だの左翼だのとレッテルを張られ、無意味化させられてしまつ危険があつたのであつた。特に、言論ならざる、一般公衆に向けて出版される「小説」では、その危険は危険以上の圧倒的現実として立ちはだかつていたのだらうと思われる。

近代日本のクロニクル

村上春樹氏が三島由紀夫から引き受けようとしたもの、それを一言でいうならば、文学における「戦後処理」であつたのであつた。それは、「羊を巡る冒険」の冒頭の章のタイトルが、三島由紀夫の割腹自殺の日である「1970年11月25日」であることに象徴されている。

ここで繰り返しとなるが、種々の村上春樹氏の小説に共通する構図を改めて記述してみることにしてみよう。

——主人公たる「僕」は日常を営んでいる。彼は完璧な存在ではないものの、彼なりの美意識に基づき、その日常をできるだけ健全で、公正なるものにするための最善の努力を尽くしている。しかし、ある日、その日常の一部が損なわれてしまふ。彼は、その事実を受け止めようとする。そして、その理由とは何かを精一杯考へる。無論、その結果、彼自身の欠点があつたことも見えてくる。しかしそれはか

りではなく、そこになんらかの不吉な、邪悪なる気配が存在することを感じ取る。彼はその気配を無視することが出来ない。その気配を漂わせる元凶に歩み寄る。するとそこに、他者の、邪悪なる意図がはつきりと浮かび上がる。そしてその邪悪なる意図が、彼の日常を損なった元凶であるという現実が明らかとなる。彼は、損なわれた日常を取り戻すため、その邪悪なる意図と戦う。しかし、結局、彼はその邪悪なる意図に対して為す術なく、邪悪なる意図と戦いはほどなく終了してしまふ。そして彼は再び、損なわれたままの日常に、深い哀しみと共に帰還する――。

この物語は、近代日本のクロニクル（年代記）そのものなのではなからうか。すなわち、主人公たる「僕」こそが「日本」そのものなのではなからうか。

――日本は黒船の来航以前、日本独自の歴史を紡いできた。完全無欠の文明であるとは言えないものの、日本独自の美意識に基づき、健全で、公正なる社会を築くべく、最善の努力を重ねてきた。しかし、黒船の来航以降、日本では、様々なものが損なわれていくこととなる。それは例えば、ラフカディオハーン（小泉八雲）の様々なエッセーからも伺い知ることができる。彼は、明治初期に、それまでに存在していた様々な日本の美徳が急激に損なわれていったことを刻銘に書き記している。日本は、その損なわれつつある現実を取り戻すべく、最善の努力をする。

一つは、自らの欠点とは何かを徹底的に洗い出す作業であった。そしてその結果、物質文明の力が不足していたが故に、欧米列強の圧力に屈しつつある現実を的確に把握するに至る。そして、そのための最善の努力、「富国強兵」を目指していく。

しかし、近代の日本は、日本の日常が損なわれつつあるその本質的な原因は、欧米列強の邪悪なる意図であることを感じ取る。その邪悪なる意図に気付かないふりを続ければ、他のアジア諸国と同様、植民地支配が待ち受けているだけである。だとするならば、日常を守り、そして、かつての平和を取り戻すためにも、その邪悪なる意図と対峙し続けなければならない。当然、当初は様々な外交交渉の形をとった。しかし、その内に戦争を決意せざるを得ない状況が訪れてしまふ。そして、日本は百年にわたる欧米列強との長い戦争を続けざるを得なくなってしまう。それはもちろん、「僕」が好んで邪悪なる悪意との戦いに赴いたのではないように、日本が望んで仕掛けた戦争なのではない。そしてその戦いの挙げ句、「僕」が邪悪なる意図の前に為す術無く敗れ、損なわれた日常に再び帰還したように、日本も百年にわたる長き戦争に敗れ、損なわれた日常に、戦後という「空虚な日常」に帰還したのである――。

村上春樹氏の世代以下、例えば筆者を含む世代にとっては、「戦争」や「敗戦」は歴史的事実にしかならず、直接肌で感じ取るものではなかった。そして、「戦争」や「敗戦」にまつわる言説はいずれも、少なくとも筆者の子供の頃の経験から言つならば、子供の目から見ても空々しいものばかりであった。そんな中で、筆者が、自らの体験において、日本が体験した「敗戦」と類似したであろう体験は、たかだか、村上春樹氏の小説を読みながら体験した「追体験」しかなかったのである。

何とも悲しい話である。戦後日本は、日本の敗戦の哀しみを、筆者を含めた後生の人間に、直接的に伝える術を失ってしまったのである。こんなにも大きな小説ならざる「大説」を、一般公衆に届ける言葉が溶解してしまっていたのである。それこそが、「戦後」という言論空間の虚構性の本質と云って過言ではないように思う。

村上春樹氏は、その戦後の硬直化した言論空間の虚構性を全て踏まえた上で、あって「敗戦」を戦争という概念装置を一切使用せずに語ろうとしたのではなからうか。つまり、村上春樹氏は、彼自身の「戦後空間」を、彼自身の物語の中で構成し、戦後の言論空間の虚構性をすり抜けようとしたのではなからうか。そしてそのもくろみは、少なくとも筆者一名に対しては、功を奏したのである。そしてそれはおそらく、筆者一人に対してだけでは無かったのではないかと思う。それが村上春樹という流行作家の小説であったが故に、我々の世代全体に、多かれ少なかれ、影響を及ぼし得たのではないかと思えるのである。

希望の予言

村上春樹氏は、こうして、彼の初期的な八十年代のいくつかの小説の中で、敗戦とそれに引き続き続く戦後空間を仮想的に構成したのではないかと思う。しかし、九十年代に入り、彼の「戦後処理」に少しずつ変化が見られてくる。例えば、「ねじ巻き鳥クロニクル」では、村上春樹氏の他の小説と同様、主人公は、邪悪なる意図との戦いに完全に勝利することなく、日常を完全に取り戻すことに、すなわち、この小説においては彼の「妻」を再び取り戻すことに失敗する。しかし、この時、主人公は、それまでの小説の様に哀しみのみを携えて日常に帰還するのではない。その哀しみと共に、妻を取り戻すのだという意志と希望を携えつつ、日常に帰還するのである。

八十年代、筆者が高校生、大学生であったころ、「戦争」や「敗戦」を巡る日本の言論空間は、今よりもずっと硬直したものであったように思う。しかし、偶然が必然か、村上春樹氏が小説の中で戦後と敗戦を再構成して以降、九十年代には例えば「発言者」が創刊され、小林よしのり氏の「戦争論」が出版され、戦争や敗戦を巡る言論空間の空気は徐々に軟化していったように思う。そして、その九十年代に、村上春樹氏は「ねじ巻き鳥クロニクル」の中で、「希望」が存在しうる戦後空間を構成した。そしてその後二十一世紀に入り、偶然が必然か、「発言者」は「表現者」に引き継がれ、そして「逆境であればこそ希望の炎が起ち上がる」と宣言しつつ、「北の発言」が発刊された。

こう考えれば、村上春樹氏は、現代の予言者ともいえる役割を担っているのかも知れない。無論、それは、村上春樹氏に超自然的な能力が備わっているということとを指摘しているのではない。それは、村上春樹氏は時代のうねりを読み取る直感を持つ小説家なのではないか、と思えるということなのである。

ここで、村上春樹氏の二〇〇二年に出版された長編小説、「海辺のカフカ」を思い出してみよう。その主人公は十五歳の少年である。この少年は大切なものを失い、不思議な空間をさまよいながらも、最終的に現実の世界に舞い戻る。彼は、彼が失ったものを、そして、その哀しみを決して忘れはしない。ここまでは、村上春樹氏のこれまでの小説と同様である。しかし、唯一違うのは、主人公が、「十五歳の少年」であるという点である。しかもその少年は、自らが空想の中でつくりだした架空の他者から、何度も次のように語りかけられている。「世界一、タフな十五歳の少年なのだ」と。

村上春樹氏の小説の中で、これほど未来に希望を託すことができる小説はない。主人公は、未だ十五歳の少年なのである。しかも、世界一タフな十五歳の少年たろうと決意した少年なのである。自身が失った大切なものを決して忘れず、しかもそれを失った深い哀しみを携えながら生きていくことを決意した少年なのである。もしも、村上春樹氏が現代の予言者の役割を担っているとするなら、「海辺のカフカ」の出版は、そう遠くない将来に、この近代の日本が、長くて暗い「戦後」というトンネルから脱け出す準備が整うことについての一つの予兆を意味しているのかも知れない。

無論、現代の世を見渡すに、愚衆政治がほぼ極限にまで進行し、いたるところで異臭を放つ腐敗が横行し、下流社会から自ら這い出す気力を持たない若者が増殖し続けていることは間違いない。その惨憺たる現状を見るに付け、希望の灯が吹き消されてしまいそうになることは否定しがたいところである。そして、そうした惨状が、「日本の中枢」となる世代が戦争を戦い抜いた世代から戦後の民主主義教育を一杯に吸い込んだ戦後の世代へと移行したことの必然的な帰結であると考えられるなら、戦前の世代がおおよそ消滅するのである。近未来に希望を託すことは、極めて困難なことであるように思える。しかし、こうした絶望的とも言える状況の中でもなお、やるべき事が何一つ残されていないという事態には未だ至ってはいないようにも思う。そうであればこそ、希望を持ち続けることは決して不可能なことではないのである。

もちろん、その希望は「戦後の世代」に託さざるを得ない。しかも、その希望を託されるべき世代とは「世界一タフ」たろうと決意した世代でなければならぬ。敗戦に伴う深い哀しみを知り、邪悪なる存在の強大さを冷静に理解しつつも、希望を決して失わない意志ある者達でなければならぬ。

その世代は今、本当に、育ちつつあるのだろうか。それは、団塊の世代の次の世代のことなのかもしれないし、それこそ今、十五歳前後によくやくなった世代のことなのかも知れない。言うまでもなく、それは未来にならなければ分からない。しかしもしも、我々が希望ある未来を信ずるとするのなら、そして、いずれの世代にも希望を託されるべき可能性が残されているとするのなら、我々は誰しもが、それぞれの日常の中で最善の努力を続けねばならぬ事だけ

は間違いない。少なくとも、村上春樹氏の小説の「僕」ほどには、誠実に、公正に振る舞い続けなければならない。そして、かの「少年」のように、世界一「タフ」たるうとする決意が求められていることもまた、間違いないことなのである。

以上